

平成19年度の漁況

佐々木正・曾田一志・向井哲也

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年（昭和35年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示す。

2007年の総漁獲量は約7万7千トンで、前年および平年（過去5ヶ年平均）の1.3倍となった。これは、近年漁獲の主体となっているマアジをはじめ、サバ類、カタクチイワシ、ウルメイワシなどの主要魚種が好調であったことによるものである。このため、2007年のCPUE（1ヶ統1航海当り漁獲量）も36.9トンとなり、前年の1.2倍、平年の1.4倍となった。

なお、2007年の漁労体数は前年より1ヶ統減少して12ヶ統となった。

(2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網による魚種別月別漁獲動向を示した。

①マアジ

春～夏季に2006年級群（1歳魚）を主体にまとまった漁獲が継続した。2007年の漁獲量は約3万5千トンで、前年の1.4倍、平年の1.3倍と好調に推移した。

②サバ類

1月に約6千トンと平年を大きく上回る漁獲があり、漁獲の主体は豆サバ（0～1歳魚）であった。2007年の漁獲量は約1万4千トンで、前年の1.2倍、平年の1.4倍となり、3年連続で前年、平年を上回った。

③マイワシ

7月および10月に県東部で小中羽を中心に平年の16～25倍となるまとまった漁獲があった。2007年の漁獲量は約3千3百トンで、前年の1.9倍、平年の4.4倍となり、5年連続で増加となった。しかし、マイワシ資源は全国的に低水準状態にあり、資源の回復は当分見込めそうにない状況にある。

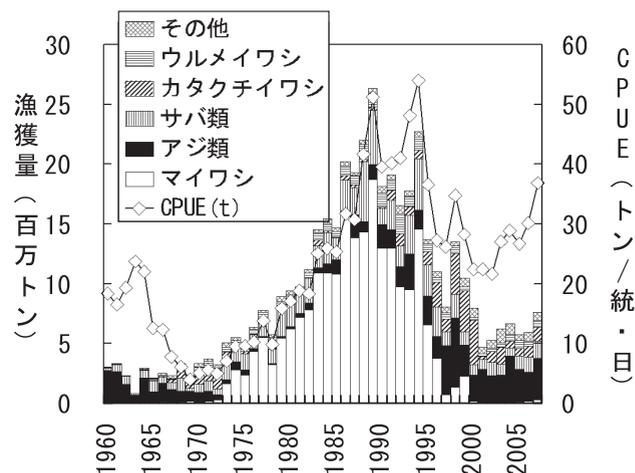


図1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲量とCPUEの推移（2002年までは農林統計値、2003年以降は漁獲システム集計値）

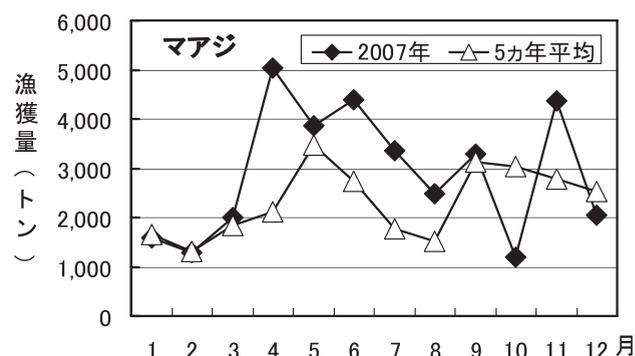


図2 中型まき網によるマアジの漁獲量

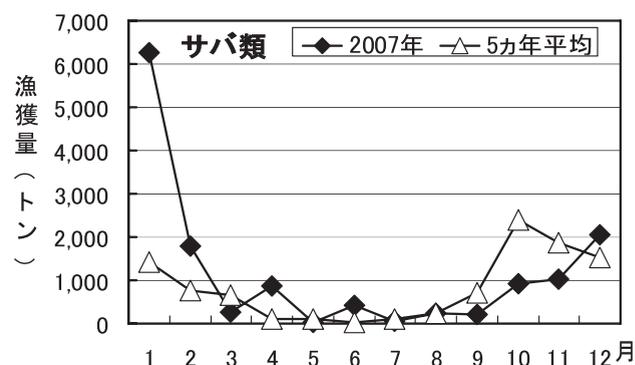


図3 中型まき網によるサバの漁獲量

④カタクチイワシ

3月に県東部で5千トンを超えるまとまった漁獲があった。2007年の漁獲量は約1万1千トンで、前年の1.2倍、平年の1.3倍と好調であった。

⑤ウルメイワシ

10月に県東部で3千トンとまとまった漁獲があった。2007年の漁獲量は約6千3百トンで、前年の1.5倍、平年の1.3倍と好調であった。

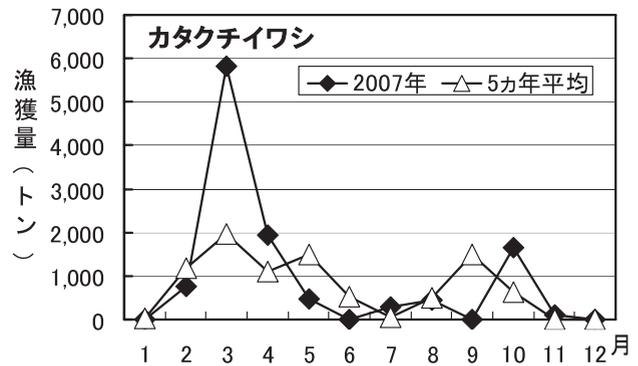


図5 中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量

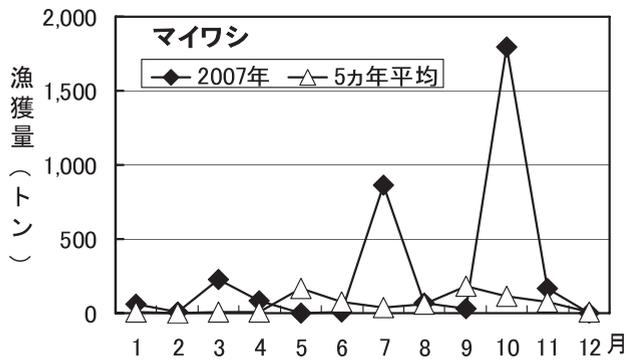


図4 中型まき網によるマイワシの漁獲量

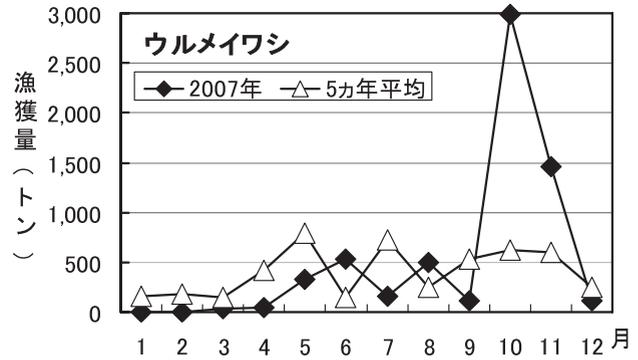


図6 中型まき網によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

ここでは、いか釣り漁業（5t未満船）、小型いか釣り漁業（5t以上30t未満船）、および中型いか釣り漁業（30t以上）によって浜田港に水揚げされたイカ類の漁獲動向をとりまとめた。

(1) スルメイカ

浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量および水揚げ金額の動向を図7と8に示す。2007年の漁獲量は941トンで、低調であった前年の1.7倍と増加したものの、依然として低調な傾向が続いた。水揚金額は3億1千万円で、単価が低かったことから前年の1.4倍に留まった。

図9に月別の漁獲動向を示す。浜田港において漁獲の主体となっている冬季発生群は1～3月はほぼ平年並みに漁獲されたが、4月以降は北九州沖の海域などで漁場が形成されたために島根県沖合海域での漁獲量は少なくなった。

(2) ケンサキイカ

浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲および水揚げ金額の動向を図10と11に示す。

2007年のケンサキイカの漁獲量は、403トンで、スルメイカと同様に低調であった前年の1.3倍となったものの、依然として低調傾向が継続した。水揚げ金額は3億7千万円で、前年の1.5倍となった。

図12に月別の漁獲動向を示す。2007年は漁期の開始時期が平年より1ヶ月程度遅く、漁獲が増加した8月以降も低調に推移した。

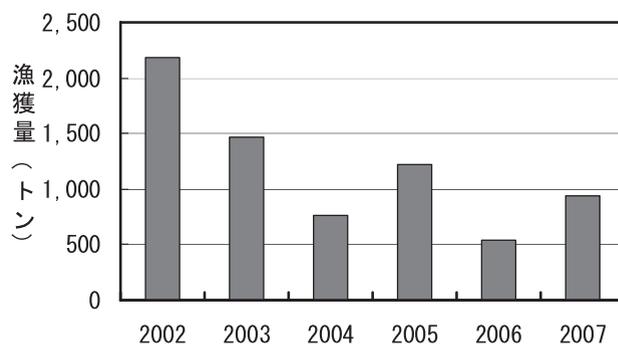


図7 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量の動向

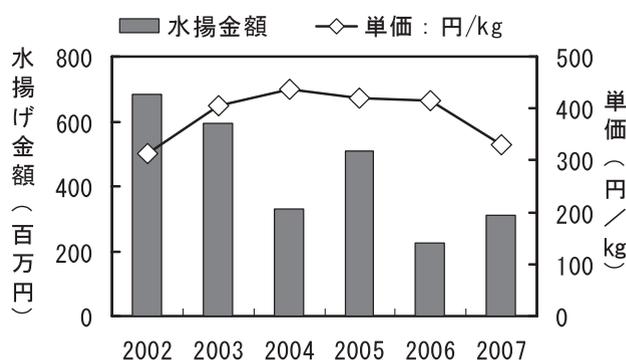


図8 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲金額と単位の動向

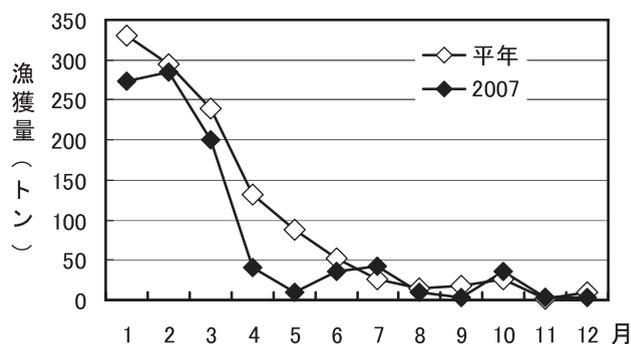


図9 浜田港に水揚げされたスルメイカの月別漁獲動向

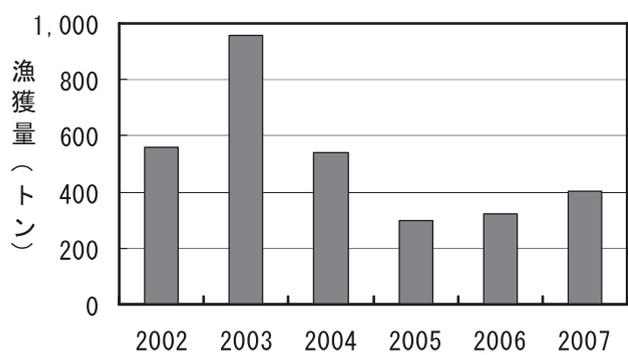


図10 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲量動向

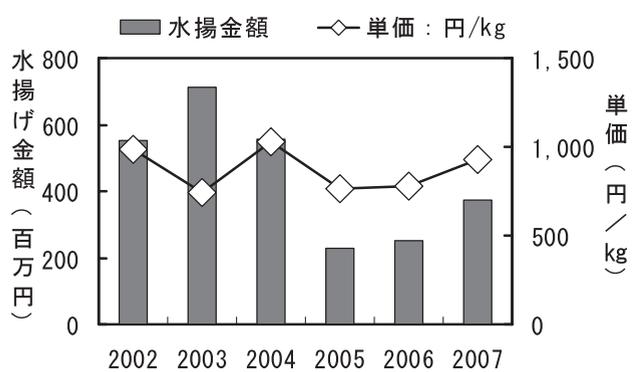


図11 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲金額と単価の動向

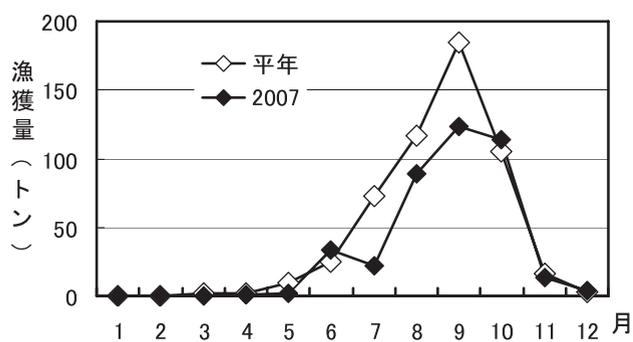


図12 浜田港に水揚げされたケンサキイカの月別漁獲動向

3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経128度以東の日本海南西海域を漁場としており、島根県では8ヶ統が操業している。本報告では、このうち浜田港を基地として操業を行っている5ヶ統を対象としてとりまとめを行った。操業期間は8月16日から翌年5月31日までで、6月1日から8月15日までは禁漁期間である。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした。

(1) 全体の漁獲動向

図13に1981年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（以下、浜田沖底という）における総漁獲量と1ヶ統当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

総漁獲量は、1980年代後半から1990年代前半にかけて操業統数の減少により急激に減少したが、1993年以降3,000トン台で安定して推移している（1986年に漁獲量が急増しているのは出雲魚市所属船が旧浜田市漁協に加入し集計統数が増加したことによる）。一方、CPUEは日韓新漁業協定が発効された1998年以降急増し、2007年は前年に引き続き600トンを超え、1981年と同水準であった。

2007年の浜田沖底の総漁獲量は前漁期を2%下回る3,273トン、CPUEは655トン/統であった。また、総水揚げ金額は16億647万円、1統当たり水揚げ金額は3億2,129万円で、前漁期を5%上回り、81年以来最高の水揚げ金額を記録した。これは、今漁期は、主な漁獲対象であるカレイ類が堅調に推移したことに加え、1～5月にマフグが374トンとまとまって漁獲されたことが理由である。

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図14にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

ムシガレイは長期的に減少傾向にあったが1993年を底に、1990年代後半は増加に転じた。2007年の漁獲量は471トン、CPUEは94トン/統

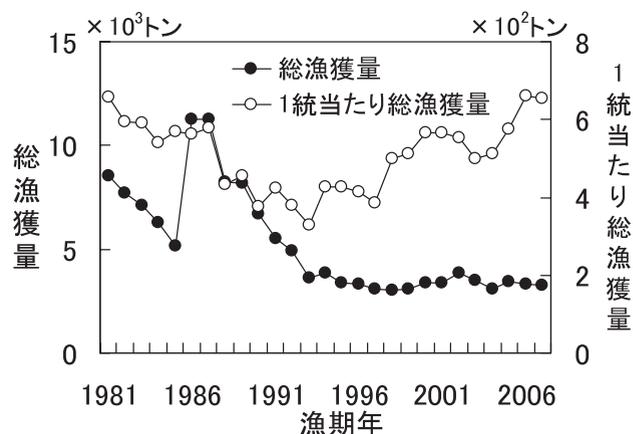


図13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり総漁獲量の経年変化

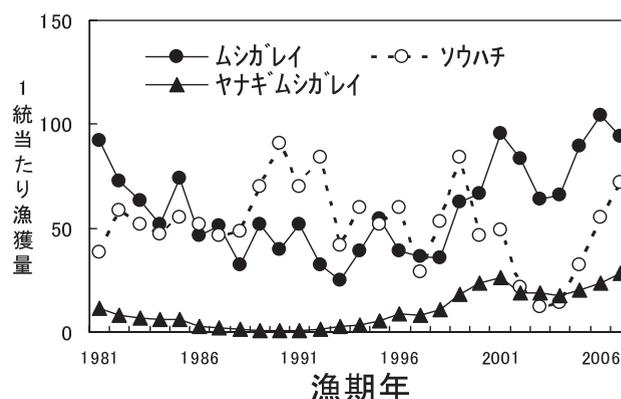


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1統当たり漁獲量の経年変化

で、前年を10%下回ったものの、平年（1997～2006年の平均）を33%上回った。

ソウハチは1990年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にあった。特に1999年以降は急減し、3年間で1/4まで減少した。しかし、2005年から増加に転じ、2007年の漁獲量は359トン、CPUEは72トン/統で、前年を29%、平年を80%上回った。今漁期は前漁期に引き続き、島根沖冷水の張り出しが例年よりも強く、冷水性の本種の漁場が比較的沿岸部に形成されたことが原因と思われる。また、小型魚が多く漁獲され、資源の減少傾向から増加傾向への転換が期待される。

ヤナギムシガレイは1991年以降増加傾向にあったが、2001年以降は停滞気味である。2007年の漁獲量は141トン、CPUEは28トン/統で、

前年を16%上回り、平年を50%上回る水揚げがあった。

②イカ類

図15にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは周期的に増減を繰り返していたが、最近3年間は大きく減少したままである。2007年の漁獲量は87トン、CPUEは17トン/統と前年を41%下回り、平年の35%に留まった。

一方、ヤリイカは1990年以降急激に減少し、近年は低位横這い傾向にある。2006年の漁獲量は38トン、CPUEは8トン/統であった。

③その他

図16に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

アナゴは1995年以降、漁獲量の年変動が大きくなり増減を繰り返している。2007年の漁獲量は138トン、CPUEは28トン/統で、前年を45%、平年を26%下回った。

アンコウは1990年代以降増加傾向にある。2007年の漁獲量は256トン、CPUEは51トン/統で、前年を25%下回ったものの、平年を52%上回った。

キダイは1990年代に入って増加傾向を示していたが、1998年以降年変動が大きくなり、好不漁を繰り返している。2007年の漁獲量は153トン、CPUEは31トン/統で、前年を27%下回ったものの、平年を7%上回った。

ニギスも90年代に入り周期的に大きな変動を示している。2007年の漁獲量は190トン、CPUEは38トン/統で、前年を17%、平年を31%上回った。

アカムツは1999年、2000年と急増したものの2001年に急減、その後は緩やかな増加傾向を示している。2007年の漁獲量は46トン、CPUEは9トン/統で、前年の38%に留まった。近年、緩やかながら増加傾向が見られていたが、再び減少しており、今後の資源動向に注意が必要である。

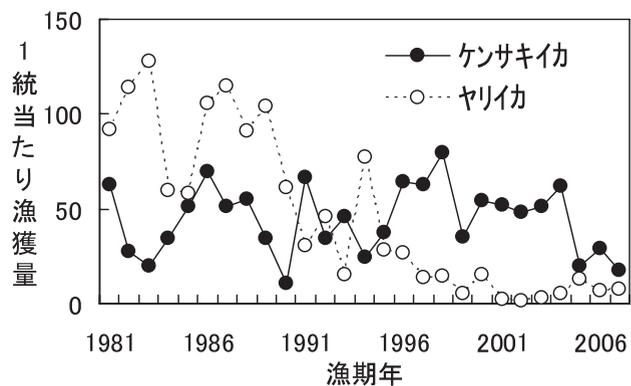


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化

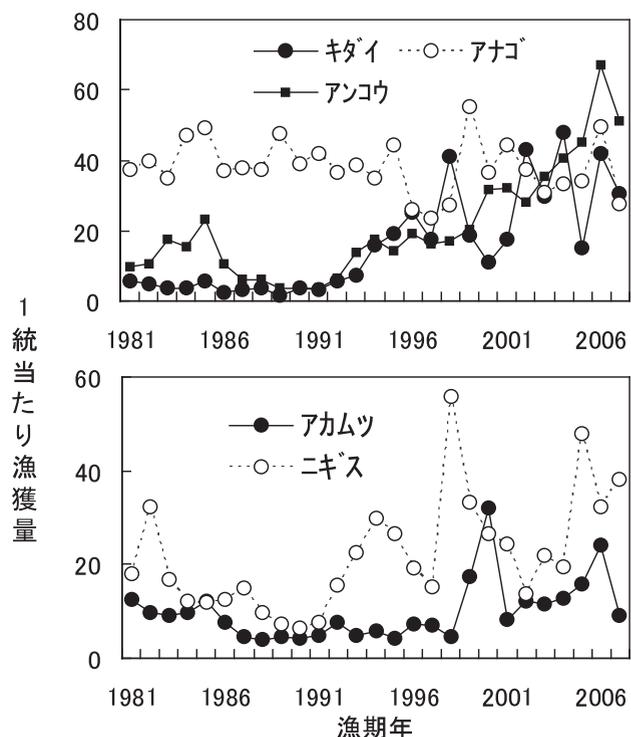


図16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要種の1統当たり漁獲量の経年変化

4. 小型底びき網漁業第1種

本漁業は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深80～180mの海域を漁場とし、現在57隻が操業を行なっている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである（6月1日から8月31日までは禁漁期間）。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。

(1) 全体の漁獲動向

図17に1993年以降の小型底びき網漁業（以下、小底という）における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化を示す。

2007年の小底全体の総漁獲量は6,568トン、総水揚金額は24億826万円であった。一方、1隻当たり漁獲量は115トン/隻、水揚金額は4,225万円/隻で、平年（過去10年平均値 86.5トン/隻、3,826万円/隻）を上回った。大型クラゲが来遊したものの沖合域は比較的少なく、操業が順調に推移したことや、ソウハチ、アンコウの漁獲が好調だったことが好漁であった主な原因と考えられる。

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図18にカレイ類の1隻当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは5トン/隻前後で比較的安定して推移している。2007年の漁獲量は250トン、CPUEは平年（過去10年平均）を16%下回る4.4トン/隻であった。

ソウハチの漁獲量は2000年以降急減したが、2007年は急増し、漁獲量は1,728トン、CPUEは30.3トン/隻で平年を80%上回り、1993年以降最高となった。

メイタガレイの漁獲量は141トン、CPUEは2.5トン/隻で、平年を66%上回った。

またヤナギムシガレイ（1.7トン/隻）は平年並みであった。

②イカ類

図19にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカのCPUEは3トン/隻前後で推

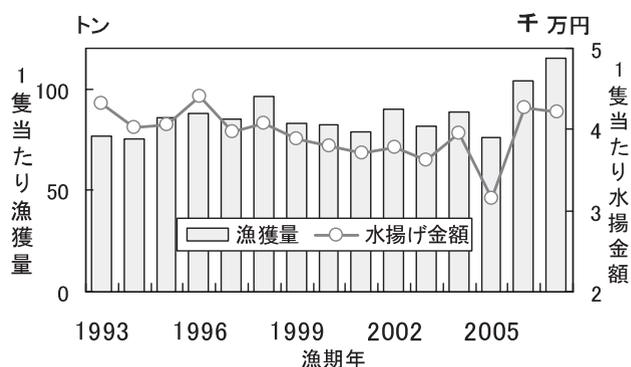


図17 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

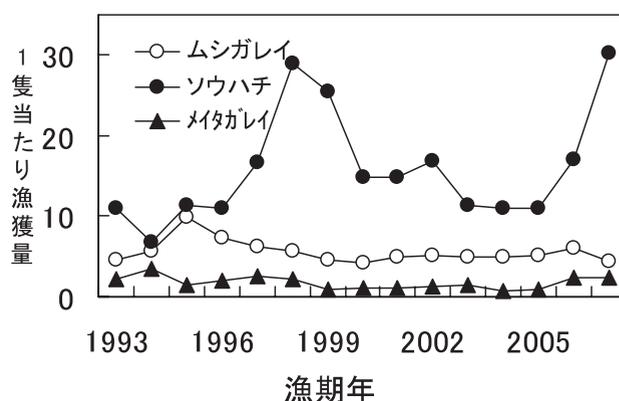


図18 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

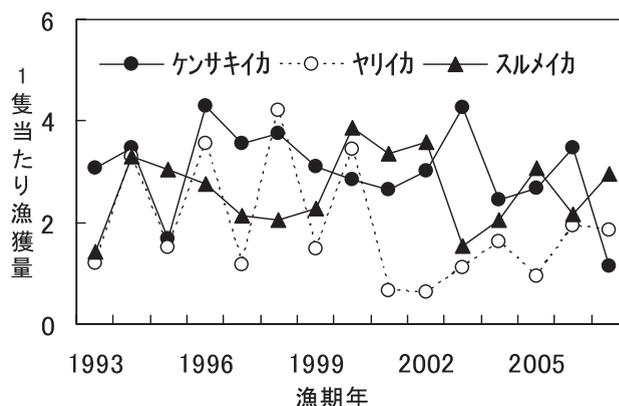


図19 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

移していたが、2003年に急増して4トン/隻を越えた。

2006年はやや回復したが、2007年には再び減少した。漁獲量は65トン、CPUEは1.1トン/隻で、平年の36%に留まった。

一方、ヤリイカのCPUEは2001年までは1年おきに好不漁を繰り返していたが、2002年以降は低水準傾向が続いている。2007年の漁獲量は105トン、CPUEは1.8トン/隻で平年比107%と、ほぼ平年並みの漁獲に留まった。

スルメイカの2007年の漁獲量は169トン、CPUEは3.0トン/隻で、前年を37%、平年を14%上まわった。

③その他

図20に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

近年増加傾向にあるアンコウは2006年に急増し、2007年はそれをさらに上回り733トンの水揚げがあった。CPUEは12.9トン/隻で、平年を103%上回った。

ニギスのCPUEは1999年に大きく落ち込んだ後2002年から再び10トン/隻前後まで増加したが、その後は停滞しており2007年の漁獲量は727トン、CPUEは12.7トン/隻であった。

アナゴ類の2007年の漁獲量は148トン、CPUEは2.6トン/隻で、平年を9%下回った。

アカムツの漁獲量は86トン、CPUEは1.5トン/隻で、平年を20%下回った。

キダイの漁獲量も沖底と同じく大きな年変動を示す傾向にある。2007年の漁獲量は439トン、CPUEは7.7トン/隻で、好調だった前年を5%下回ったものの、平年を38%上回った。

ハタハタの漁獲量も年変動が大きく、ほとんど漁獲されなかった2006年に対し、2007年は53トン、CPUEは0.9トン/隻漁獲されたが、平年の43%に留まった。

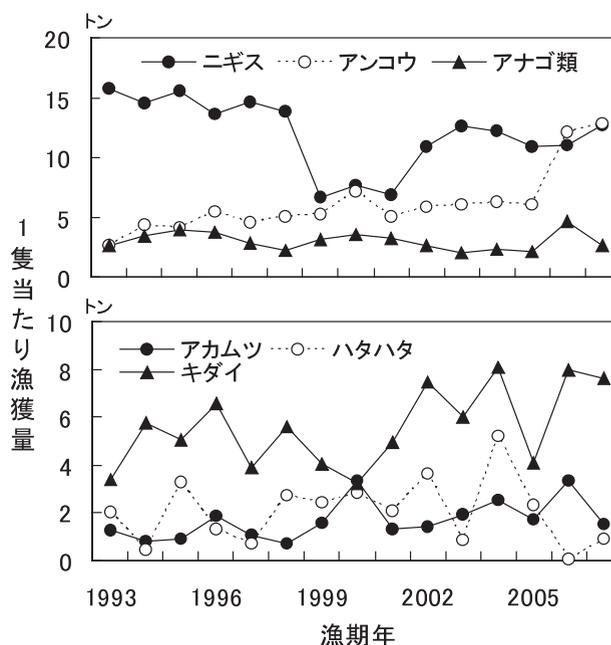


図20 小型底びき網漁業におけるその他主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

5. ばいかご漁業

石見、出雲海域におけるばいかご漁業は小型底びき網漁業（第1種）休漁中の6月～8月にかけて行われており、平成19年の稼働隻数は6隻（石見部5隻、出雲部1隻）であった。解析に用いた資料は、JFしまねからの漁獲データと各漁業者に記入依頼を行なっている操業野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、エッチュウバイの価格動向および漁場利用について検討を行なった。また、資源生態調査として、JFしまね大田支所ならびに仁摩支所に水揚げされる漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、この結果と銘柄別漁獲量からエッチュウバイの殻高組成を推定した。

(1) 漁獲動向（図21～23）

平成19年のエッチュウバイの漁獲量は、平年をやや上回った。ただし、単価は平均371円/kg（前年377円）と前年以上に低く、バイの漁獲金額は3,554万円（平年比の75%）にとどまった。（図21）。1隻あたり漁獲量では平成19年度は漁獲量・金額共に前年を下回ったが、平年は上回っている（図22）。

(2) 資源動向（図23、24）

エッチュウバイの資源状態の目安となる1航海あたり漁獲量は、平成12年以降下降を続けていたが、平成19年度は487kgと平成12年以前の水準に回復した。ただし、前年と同様大型貝の比率が高く、1航海あたり漁獲個数では過去2番目に少ない。漁獲物の殻長組成から見ても小型貝が少なく、資源状況は依然厳しいと考えられる。

(3) 漁場（図25）

漁場は前年と同じようにN35° 35～45'、E132° 10～30' 付近の漁場に集中している。

(4) 魚価の推移（図26、27）

平成19年度は単価の低い大型貝が多くを占めたこともあり、エッチュウバイの1kgあたり平均価格は石見部で366円（前年比－7円）、平田支所で412円（前年比＋11円）と石見部では過去最低となった。このため、1漁期のエッチュウ

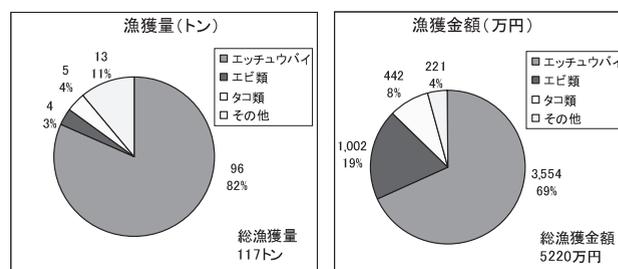


図21 平成19年度ばいかご漁業(石見・出雲)の漁獲量・漁獲金額 (*全船)

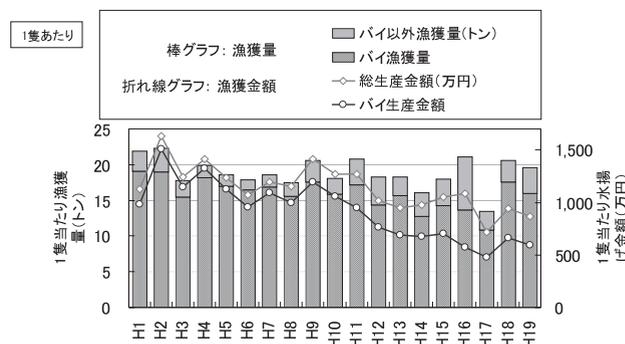


図22 ばいかご漁業における1隻あたり漁獲量の推移

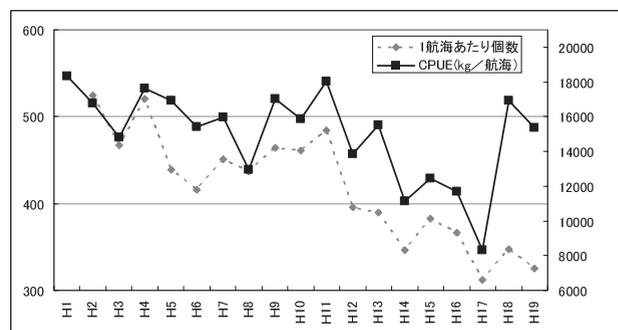


図23 エッチュウバイのCPUE（1航海あたり漁獲量）の推移

ウバイ漁獲量の自主規制値である20トン近くを漁獲してもその金額は700万円ほどにしかならず、魚価安はバイかご漁業の経営が好転しない大きな要因となっている。

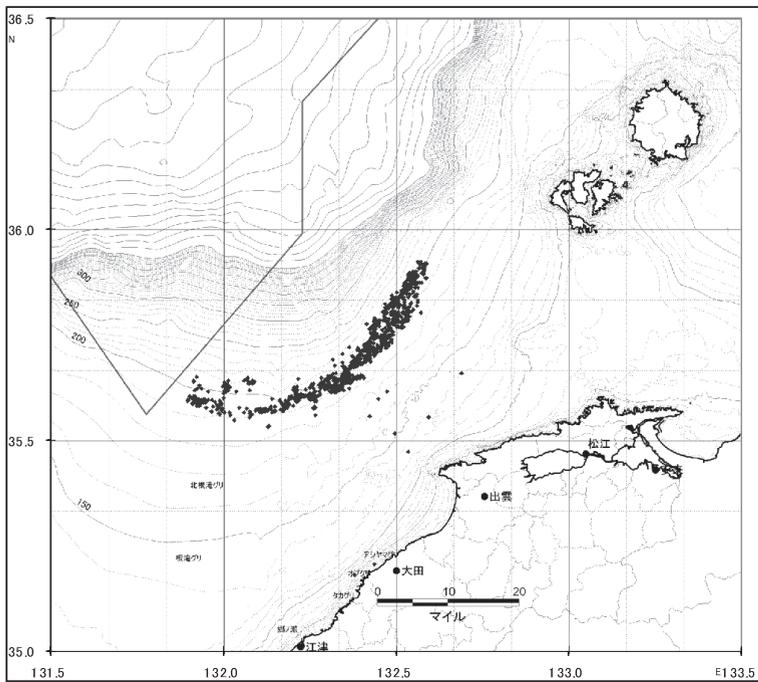


図25 平成18年度ばいかご漁業の漁場

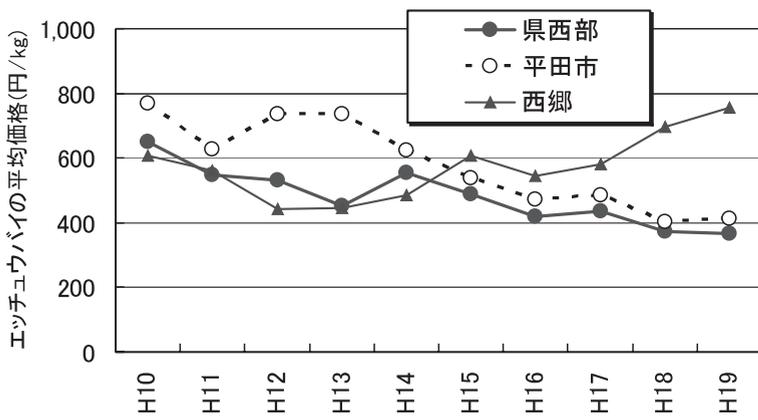


図26 エッチュウバイの平均単価の推移 (6 - 8月)

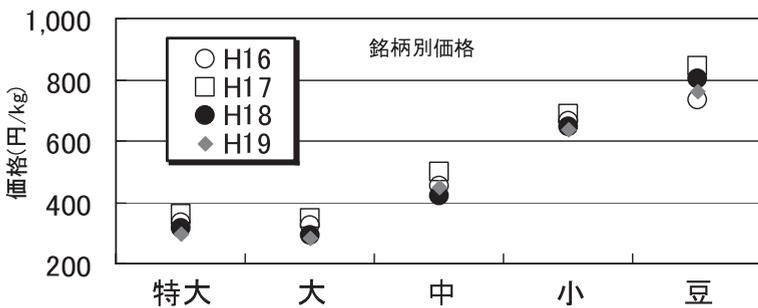


図27 エッチュウバイの銘柄別単価

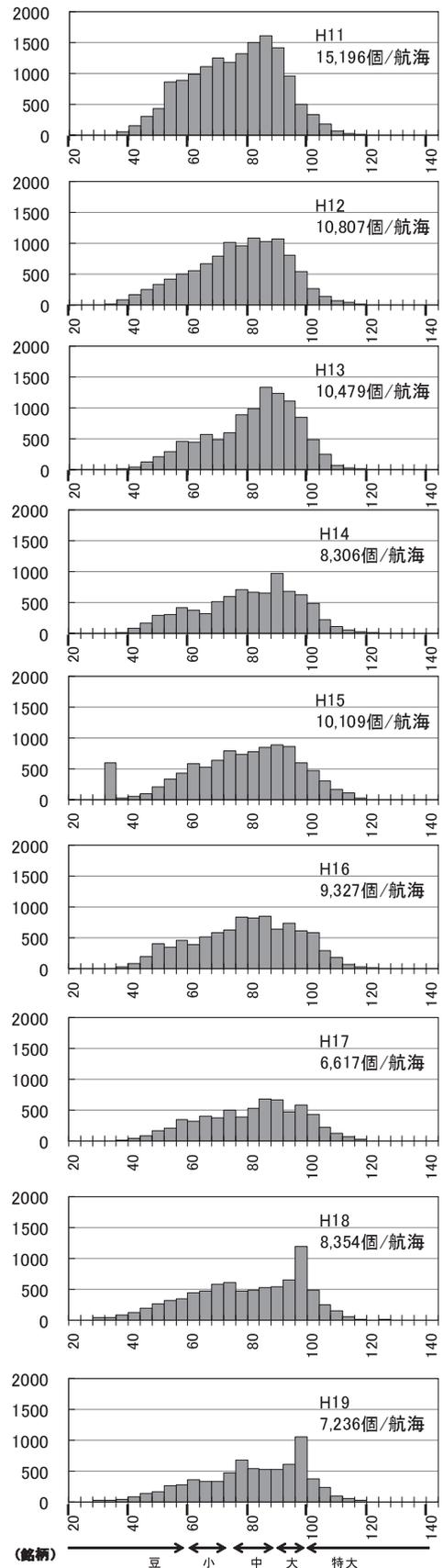


図24 エッチュウバイの殻高組成の推移 (個数は1航海当たり)